アフォーダンスによるフレーム規定

over の従事用法を中心に

石　垣　恵　一

１．はじめに

本稿はアフォーダンス(Gibson 1979)の概念に着目し、フレーム意味論(Fillmore 1982)におけるフレームの規定にはアフォーダンスが有効であることを論じていく。本稿では特に以下の(1)にあるような英語前置詞 over の従事用法（「～しながら…」、ジーニアス英和大辞典参照）に焦点を当て、前置詞 over の先行研究である Brugman(1988)とフレーム意味論では捉えきれない例をアフォーダンスを用いて考察していく。

(1)　We talked over lunch.　(Brugman 1988)
(2)　I had the flu over Christmas.　(ibid)
(3)　We discussed it over a glass of wine.　(Quirk et al. 1985)

２．先行研究－Brugman(1988)とフレーム意味論

Brugman(1988)では(1)を時間用法の一部として扱いながらも、(2)にあるような典型的な時間用法とは異なる制約を持つものとしており、(1)のような文のトラジェクター（第一焦点参与体）はコミュニケーションに関係しているものであるとしている(Brugman 1988: 19)。加えて(1)での over の目的語である‘lunch’は「行為」としてメトニミー的に捉えられる一方で、(2)での over の目的語である‘Christmas’は「行為」として捉えることはできないという違いも見られる。これらの事実をもとに、本稿ではまず、(1)と(2)での over 句は異なる用法であると捉える。さらに Quirk et al.(1985: 685)では、(3)での over 句を時間用法ではなく *ACCOMPANYING CIRSUMSTANCE* であるとしている。そのため(3)での over 句の用法は、(1)と同じ用法であると考え、本稿では(1)での over 句を従事用法として扱う。

Brugman(1988)の研究から、従事用法の容認性の鍵となるのは伝達動詞であると考えられるが、以下のように、同じ主語、同じ伝達動詞が用いられていても、従事用法として容認されない例や、発話される状況により判断が変わるといった例も存在する。

(4)　*We talked over (a glass of) water.　(Informant)
(5)　?We talked over a Red Bull.　(Informant)

これらの例はフレーム意味論の観点から、コミュニケーションフレームが関係していることを踏まえると理解を進めることができる。すなわち(1)や(3)では、昼食を食べながら話をしたり、ワインを飲みながら議論を交わすといった行為を同時に行うことは習慣的であり想起可能であるため、コミュニケーションフレームが喚起されると考えられる。しかし(4)では、ただの水を飲みながら話をするという行為は一般的であるとは考えられず、さらに(5)では具体的な飲み物が用いられているので発話場面がかなり限られる。そのため(4)と(5)ではコミュニケーションフレームが喚起されない。

このように、同じ伝達動詞が用いられていても、コミュニケーションのフレームが喚起されるかどうかは、従事用法の容認性に深く関わっていることが分かる。しかしながら以下の(6)と(7)にあるように、一見すると動詞にコミュニケーションフレームが無いように思われるが、従事用法として容認される例が存在する。

(6)　“I have ordered a carriage,” said Lestrade as we sat over a cup of coffee.　(Doyle 1892)

(7)　“You see, Watson,” he explained in the early hours of the morning as we sat over a glass of whisky and soda in Baker Street, … .　(ibid)

以上のことから、Brugman(1988)や Quirk et al.(1985)での、動詞のコミュニケーションフレームを用いた over の従事用法の考察は不十分であることが分かる。

３．アフォーダンスとフレームの規定

over の従事用法の容認性に関係する動詞のコミュニケーションフレームの存在をより明確にするために、本稿ではアフォーダンスを援用する。Gibson(1979)ではアフォーダンスは以下のように定義されている。

(8) The affordances of the environment are what it offers the animal, what it provides or furnishes, either for good or ill. (Gibson 1979)

アフォーダンスとは「身体をベースにした知覚者と対象との行為の可能性」のことである。例えば（ナイフなどの）硬くて鋭い刃をもつ握ることのできる対象は切ることやばらばらにすることをアフォードする(Gibson1979: 40-41)。本稿では、この「対象」を「行為」に拡張させることにより、「ある行為が別の行為をアフォードする」という点に着目する。

(6)と(7)を見てみると、従事用法を含む節の動詞はどちらも‘sit’が用いられている。動詞‘sit’は非伝達動詞であるため、内在的に「コミュニケーションフレーム」を持っているとは考えづらい。ここでアフォーダンスを導入すると、解決の糸口が見えてくる。動詞‘sit’の「座る」という行為は、一見すると発話とは何の関係もないように思えるが、「座る」という行為はただ座ることが目的ではなく、座って他の行為をすることが真の目的であると考えることが自然である。すなわち「座る」という行為には、他の様々な行為を行う可能性が秘められている。つまり動詞‘sit’は「話をする」という行為をアフォードすると捉えることが可能であり、コミュニケーションフレームを持っていると考えられるため、(6)と(7)は容認可能ということになる。

(9) ?We sat over a cup of coffee. (Informant)
(10) ?We sat over a glass of whisky and soda. (Informant)

(9)と(10)はそれぞれ(7)と(8)から従事用法の節だけを取り出した文である。(7)と(8)は従事用法として容認可能であったのに対し、(9)や(10)になると従事用法としての容認性がかなり下がる。このことから分かるように、「座る」という行為がコミュニケーションフレームを持つ行為をアフォードする際には、その状況を想起できる状況、すなわち文脈が必要である。

４．まとめ

前置詞 over のこれまでの研究により、over の従事用法にはコミュニケーションに関係するフレームが必要であることが分かった。しかしながら、一見コミュニケーションフレームを持っていないように思える非伝達動詞‘sit’を用いた場合でも従事用法として容認される例があることから、先行研究での考察は不十分であることが分かった。本稿では動詞のコミュニケーションフレームを考察する際に、アフォーダンスを援用した。そのことにより、コミュニケーションフレームを喚起する状況をより広範囲で定義することが可能となり、フレームの規定に有効であることが分かった。またこのことにより、本稿では扱わなかったその他の従事用法の周辺事例も的確に定義できるかもしれないが、それは今後の課題としたい。

５．参考文献・参考図書・辞書

Brugman, Claudia. 1988. *The Story of Over: Polysemy, Semantics, and the Structure of the Lexicon*. New York & London: Garland Publishing, Inc.

Fillmore, Charles. 1982. “Frame Semantics.” In *Linguistics in the Morning Calm*, 111-138. Seoul: Hanshin.

James, Gibson. 1979. *The Ecological Approach to Visual Perception*. London: LEA Publishers.（古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻共訳. 1985. 『生態学的視覚論、ヒトの知覚世界を探る』サイエンス社.）

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Harlow, England: Longman.

佐々木正人. 2015.『新版アフォーダンス』岩波書店.

Conan, Doyle. 1892. The Red-Headed League in *The Adventure of Sherlock Holmes*. England: George Newnes.

ジーニアス英和大辞典. 2001-2008: 大修館書店.